

「図説 食道・胃病変の内視鏡と生検」

Endoskopie und Biopsie der Speiseröhre und des Magens

〔著〕 L. Demling, R. Ottenjann, K. Elster

〔訳〕 竹本忠良, 神津忠彦

京都府立医科大学教授

川 井 啓 市

食道, 胃病変の内視鏡と生検は何といっても図説と書いているように全体の半分, 右ページに 235 図と, 非常に豊富な写真で目を楽しませてくれる。

この書は私にとって非常に懐かしい本である。というのは私ごとになるが, 著者のひとり, 当時 Privat Dozent であった Dr. Ottenjann (彼は1970年, 大阪での日本消化器病学会総会〔会長・増田正典教授〕に Prof. Elster と一緒に出席し, 演題を発表しているので, 本邦でも記憶の方も多いと思うが) の Wiesbaden での自宅に泊った時のことで確か1971年の秋だったと思うが, 彼の地下の書斎で, 刷り上ってきたこの Farhatlas のゲラを見ながら話はずみ, 夜遅くまでディスカッションした思い出があるからである。

「いずれこの書が出版されたら, 世界の何カ国かで翻訳してほしいのだが……」といていたが, 今このように竹本教授・神津講師によって監修・翻訳されてみると, 過ぎ去った西独での滞在の日々が昨日のように思い出されてくるのである。

本書の特徴の1つは, 内視鏡に慣れた Dr. Ottenjann が材料を提供

し, ヨーロッパにおける消化器病理学の権威である Prof. Elster がていねいに, 主として生検材料の解説をし, そして消化器病学の指導者のひとりである Prof. Demling が全体的な解説のカジをとりながら, 広い視野から食道・胃疾患について述べていることである。もちろん, この書が, Deehle, Panl, Rösch, Stadelmann と現在の所属の施設は変わっても, かつては皆 Erlangen-Nürnberg 大学の内視鏡室に働いたメンバーの協力によってはじめて調和のとれた構成になったことはいうまでもあるまい。

食道に 121 ページ中の48ページ, 残りが胃疾患に使われ, 全体の構成として, 食道疾患の占める比率の高いことが, 本邦での教科書と比較して明らかであろう。そして, その図版の鮮明なのにびつくりする。これが彼らにとってのひとつの見せ場であるが, このことは日本人と比較して食道疾患の患者が多いこととともに, 消化管を食道から胃にかけて普遍的に, かつていねいに観察しようとする基本的な態度に基因しているのである。日本での比較的多くの内視鏡医が, 単に胃の観察のみで満足

してしまうのとは異なって, 彼らの姿勢が滲み出ているのが興味深い。なお, 食道の写真の大半は, ファイバースコープによるものではない。原版を見せてもらったが, 多くは Stortz Opt. Co. の Nopkins のレンズ系を応用した半硬性の食道鏡による写真である。直視の食道ファイバースコープが開発される以前からすでに, 内科医で食道観察に関する長期の歴史をもっていることは評価しなければならないと思う。

胃の領域になれば, さすがに日本の3年前のレベルと比べても多少の差が感じられる。それでもその後の3年, すなわち現在の彼我を比較してみる時, その後の西独の進歩の著しさに驚かされるのである。もちろん少人数で, 最先端のみを追いかける彼らの方向づけでは, まだまだ底辺の広さに問題を残しているが, それでも本書を通じ, ヨーロッパの消化器病学者のみた胃疾患に対する考え方を知る上で興味があり, 一読の価値はあると思われる。

(B5変型 頁144 図13 写真11
原色図213 ¥15,000 千200
医学書院刊)